

# 怪の花喰い人き凄物

国枝史郎

青空文庫



バルビユーさんの亡霊が市中へ出るといふ噂が、誰からともなく云い出された。

奇怪極まるこの評判が西班牙中スペインに拡がった頃一人の勝れた心霊学者がマドリッド市長の依頼に依つてマドリッド市へ研究に來た。

市長、警視總監、新聞記者、刑事や巡查に案内されて心霊学者のフィリツポ氏が真先に訪問おしずされた土地というのは「バルビユーさんの幽霊」がまだ此浮世このに生きていた頃そのお父さんのコックニー博士と一緒に工場を経営していたカンタブリアという小村こむらであつて、市から半哩マイルほど距へだたつた寂しい陰気な土地であつた。

禿こげた小丘こおかを背後うしろに負しよつて古びた工場が建つていた。工場の持主のコックニー博士が行方不明になつてからまだ三月しか経つていないのに工場は既に廢屋同然恐ろしい程に荒れていた。工場に添そうて建つてゐるのは博士と家政婦とバルビユー氏とが明暮れ住んでゐた母屋であつたが、窓も玄関も蜘蛛の巣だらけで人の住家とも思われぬ。観ことごとる物悉く荒れ果てた中にただ一つだけ榮さかえているのは母屋や工場を圍い繞りして立派に造られた花園だけ

で折柄秋の太陽を浴びてあらゆる薬草毒草の花が虹のように燦然と輝いている。

心霊学者のフィリップ氏はつくづく花園を眺めていたが感に堪えたように呟いた。

「流石は世界の学界に植物学の大家として名声を博した程あつて、コックニー博士の花園には無駄の草花は一本も無い。みんな珍らしい草ばかりだ」

どうやら其処を去りかねた様にフィリップ博士は佇んだまま尚も花園を見廻した。そうして花の香を嗅ぐかのように幾度も深呼吸をした後でやっと花園を背後にして工場の中へ這入ったのであつた。

工場の中も荒れていて堆高く塵が積もっていたが打見たところ諸種の機械は各自その位置に在るらしかつた。

「どうぞお静に願います」

博士は皆を振り返り見て、穏かな調子で斯う云つてから自分も堅く口を噤んで場内の一所に佇んだ。博士はその眼を幽に閉じて小首を横へ傾けた。誰も彼もみんな黙っている。あたりは死んだように静かである。博士の様子を見てると此の絶体の「静寂」の中から何かを聴こうとしているらしい。しかし「静寂」は「静寂」ばかりで他の何事をも語らない。尠くも市長や警視総監や新聞記者や刑事などには何事をも語らないように思われた。

とは云え学界のオーソリテティ權威の心靈学者のフィリップス氏にだけは何事をか語っているようにも思われた。

博士は突然斯う云った――

「もし其れが可能できることでございましたら工場の機械を運転して様子を見たいと思いたすが」

「可能できるどころではございません。すぐにも運転させましょう……それが必要だと有おっしや仰るなら」警視総監が斯う云った。

「絶対に必要でございます」

「それでは市まちから技師を呼んで運転させることに致しましょう」

斯う言つたのは市長である。

それから間もなく工場内の総ての機械が動き出した。その騒がしい運転の音に博士はまたも耳傾け微動もせず聞き入った。次第に緊張する博士の顔！それを凝視する人々の顔！その間まも鋼鉄の車輪や歯車は、物凄い唸りをブンブン揚げてその運転を続けていた。と、突然、鋭い声が――誰かに向かつて呼びかける声が博士の口から叫ばれた。

「コックニー博士！コックニー博士！あなたは学界の英雄です！そうです確かに英雄です！しかし貴郎あなたの行った事は人情的とは云われません！あなたは貴郎の寵愛物を

益々美しく生おいたさせるために恐ろしい非道を実行し貴郎自身をもその物のために犠牲にしたではありませんか！ あなたは科学界の王者です！ しかし貴郎は殺人鬼です」

## 二

理学界の権威、植物学の大家として世界に其名を響かせていた理学博士のコックニー氏が阿弗利加大陸の探検を了おえて自分の故郷のカンタブリア村そんへ自分の息子のバルビューと一緒に永住の覚悟で移転して来たのは、今から丁度二年前の金雀花えにしだの咲く春であった。六十を過ぎた老博士はよく科学者に見るような冷徹透徹した人格者で人生に対する考えなどには多少冷酷の点があつたが、その代わり自分の研究に就ついては驚くばかり熱心で何どのような人でもその点に関しては非難を加えることが出来なかつた。博士が故郷に帰つて来たのは老後を養うためでは無く却つて活躍する為であった。それは博士が帰郷するや否や広大な地所を買い入れて其処へ工場を建築して香水製造の大事業を開始したことに依つて証拠立てられた。博士は日頃の蘊蓄を傾け香水製造に熱中した。博士の造る香水は植物性の香水でその持つてゐる芳香は殆ほとんど世界無比であつた。自然香水の需要を増し工場は漸だ

時隆盛んだんになった。工場は隆盛になったけれどマドリッド市中はその代りよんどころ 抛な所ところない恐怖に包まれて次第に人心が険しくなつて夜も十時を過ぎた頃には目抜き町のA E街をさえ人つ子一人通らないようになった。

女と云わず男と云わず老人であれ子供であれ人間と名のつく生いきもの物は「姿の見えない人攫とさら」を妖怪のように恐怖おじおそれた。そして全く不心得にもその人攫の怪事件とコックニ博士の行動とを連絡させて考えて、人格の勝れた博士に対し疑惑の瞳を注ぐようになった。

怪事件というのは他でも無い。マドリッド市民が幾人となく何者にか攫われでもするやうに市中から姿を隠す事であつた。そして其そのまま永久に家へ歸つて来ない事であつた。多くの場合それらの人は其時殆言たい合わせたやうにコックニ博士がその工場か乃至なは博士が研究のために母屋や工場を包围して造り設けた花園かえんかを屹度きつと訪問して居つた。訪問したまま夫れ等その人は永久に姿を失うのであつた。

しかも事件はそればかりで無くて「姿の見えない人攫」のその恐ろしい血だらけの手はカンタブリア村からマドリッドへまで人の知らない間まに延びていた。市民がそれを知つた頃には男女取り混ぜ数人の者が市から姿を失つていた。

「誰が一体それらの人をマドリッド市内から取り去ったのか？」市民達は一斉に斯う叫んだが答は何処からも来なかった。そのように答えは来なかったけれど市民達は心では其の犯人を博士であろうと疑った。しかし疑いは疑いに停まって一つも証拠が上らなかつたので——それに博士は何んと云つても世界有数の大学者でもあるしリンネ大賞牌の受領者であつて人格にも欠点がなかつたので、警視庁の方でも博士に向かつて手を下だすことは出来なかつた。

博士に対する斯う云う非難はコックニー博士其人に執つては極わめて迷惑であつたかもしれない。それは迷惑であつた筈だ。しかも博士の迷惑は名誉上だけにとどまらず営業の方へも影響した。と云うのは博士の香水工場に使用されている職工達が博士を恐れて次第に工場を立ち去つて行くからであつた。職工の恐れるのも無理は無い。彼等の同僚の幾人かが矢張り行方が不明になつてそのまま姿を現わさないことが数回ならずあつたのだから。……兎に角斯うして博士の工場は何時ともなしに寂しくなつてそして最後には工場の中に一人の職工も居ないようになつた。諸種の機械の運転は止まり香の鋭い香水の液も漏斗から一滴も出ないようになつた。

事業は不振というよりも殆廃滅に近かつた。この廃滅を悲しんだものは博士の一人子

のバルビユーで、或夜バルビユーは博士の書齋で博士と鋭く云い合った。

「お父さん、貴郎は市の人達から吸血鬼だと云われて居るのですよ！ それを恐れて職工達は工場を見捨てて行つたのです。それなのに貴郎はその濡衣を少しも干そうとはなさらない。それが私には不可解です！ そうです私には不可解です！……」

それに答える博士の言葉は大変冷静で素気なくて、書齋の外に立聞きしていた老僕の耳には聞えなかつた。老僕の耳へ聞えるのは益々猛けり立つバルビユーの声だけで、やがて其声は呪詛となり又猛しい怒罵ともなつた。

其時初めて博士の声がハッキリ老僕へ聞えて来た。

「黙れ！ 青二才め！ 黙りおろう！ いつ迄もツベコベ吐かすなら貴様も生地獄へ墜落して○○の餌食にして了うぞ！」

博士の声が消えた後は書齋の中は寂然となつて眩き一つ聞えなくなつた。やがて老僕は聲音を忍んで書齋の前を立ち去つたが其晩を限りにバルビユーの姿は永久世間から失われた。そして間も無くマドリッド市中へそのバルビユーの亡霊が夜な夜なあらわれて出るようになった。その亡霊は首を垂れ指で地面を指差していかにも悲しそうな表情をして市中を彷徨い歩くのであつた。

斯うなつては寛大の警視庁も打ち捨てて置くことは出来なかつた。コックニー博士の召喚が部内の人々に依つて議せられた。しかし折角のその相談も実行の運びに到らないうちに当の肝腎のコックニー博士の行方が果然不明になつた。

そして夫れから三月経つた今日こんにち心靈学者のフリッツ博士が此地このに訪問おとずれて来たのであつた。

## 三

フリッツ博士は工場を出た。

「工場も母屋も一切の物を破壊しなければなりません。秘密は地下にあるのですから。屋敷を掘らなければなりません！ 美しい秘密！ 学界の秘密！ それが花咲いて居りましょう！」

博士は人々に斯う云つた。再び自動車は市まちへ飛ばされ大勢の人夫が運ばれて来た。それらの人夫の手に依つて秘密を包んだ工場も花園も母屋も破壊された。そして屋敷は掘り下げられた。最初に地下から現われたのは一町四面の硝子である。硝子を砕くとその下から

一町四方を占領した広大な花園が現われて来た！ その花園の美しさ！ その花園の物凄さ！ そこにはたった三本だけの巨大な花が咲いている。生血なまちを塗ったような深紅の花弁は五寸の厚さを持つている。花卉の内側には白銀しろがねのように輝く針毛しんもうが生えしげり、雌め蕊しべの太さは一抱えもあつて、それを取り捲まく黄金の雄蕊おしべは海軍士官の肩章のようによじりもつれて茂っている。花の直径は三間もあろうかことごと悉く花は上を向いて獲物を待つている巨う蟒わびみがその口をカツと開あいたように花卉を広く押し開あいて空の陽の光を吸っている態さまは花というよりも妖怪である。

「……阿弗利加産の虫捕董むしとりすみれと阿弗利加産の『もうせんごけ』とを、コックニー博士の手腕もつを以て交尾かけあわせて出来たのがこの花だ！ 博士はこの花の成長に良心までもうち込んだのだ！ この素晴らしい怪物は花の形をした猛獣だ！ この怪物は血の出るような生なまに肉くを一番食いたがる。嘘だと思ふなら此の花の中へ誰か飛び込んで見るがよい！」

フィリップ博士は憂鬱の声で斯う物凄く叫んだが勿論誰も花の中へ飛び込もうとはしなかつた。その時一人の若い人夫が何と思つたか列から離れて村の方へ一散に走つて行つた。そして再び帰つた時には仔牛ほどもある野犬の頸へ荒縄をつけて引いて来た。

「人間の代りに、さあ、犬だ！」

叫ぶと一緒にその人夫は犬を地の底へ蹴落した。キャンと一声鳴く間もなくもんどり打ってその犬は一つの花の上へ落ち込んだ。その瞬間に想像もつかない残酷の奇蹟が地底の花園で環視の裡に行われた。と云うのは他でもない犬が花の上へ落ちると一緒に上を向いていた花の弁が忽ち一度に方向を変え逃げようと跳く犬を包んでクルクルと内へ捲き込んだのである。犬の姿はもう見えない。花卉は犬を抱き込んだまま何時迄も何時迄も閉じている。

五分、十分、十五分！ 博士を初め誰も彼も花の働きを見守ったまま片唾を飲んで立っていた。十五分、十六分、二十分！ その時花は痙攣しながら静かに静かに運動を始め花卉が徐々にほぐれて来た。そして再び前のように深紅の花弁を上に向けて毒々しく花を開いた時には仔牛ほどもあつた野犬の姿は最早どこにも見られなかった。完全に消化されて了つたらしい。

市長官邸の客室に市長を初め警視總監や多数の記者に圍繞されて心霊学者のフィリップ氏が愁に沈みながら腰掛けていた。そして皆の乞うままに昨日の事件の説明をした。

「……今度の私の発見は、私の専攻の心霊学とは殆ど交渉でありました。私は私の常識に

依つて事件の解決をしたのでした。最初花園まで行った時よろろの草花の香に混つてアンモニアの匂が致しました。そうしてアンモニアのその匂は人体分解の結果として分泌されたものであつて葉種屋で売っているアンモニアと違ふという事を知りましたので、それに関連して直ぐ私は工場の何処かで沢山の人が分解されたことを認めました。第二に私の知つたことは工場の下か母屋の下かに大地下室があるに違ひないと斯ういうことでございます。どうしてそれを知つたかというに機械を運転させた時一通りならぬ反響が四辺あたりの空気を顛ふるわせたからで、あれだけの工場のあれだけの機械ではどのように運転を烈おこなつしく行つてもあんな反響は起こらない。それが起こるといふからには起るだけの理由がなければならぬ。どこかに地下室でも造られてあつたらその地下室へ反響してあの位の音は起るだろう。それ以外には理由がないとこのように確信したからでした。そして不幸にもその確信は事実であつたのでございます」

「それにしても博士は自分の息子のバルビユー迄もあの怪物の餌食にしたものでございませうか？」

「そうです」とフィリップ氏は市長に向かい「科学者に執つては自分の子より研究材料を愛します」

「コックニー博士本人は一体何処へ行ったのでしょうか？」

警視總監は斯う訊いた。

「コックニー博士は自分をも捨てて花に喰わせたのでございますよ……勝れた科学者は自分の身よりも研究材料を愛します」

「ところで、ところで……」と總監は無闇に呼吸いきをはずませて、

「あの恐ろしい花の名は全体何んというのです？」

「まだ学名などはありません。どうしても付けると有仰るなら『コックニー氏花』とでも付けましょうか」

「もう一つ疑問がございますが」

新聞記者が斯う云った。

「マドリッド市中へ現われたところのバルビユー氏の亡霊は……」  
「否！」と博士は苦笑しながら記者の愚問を遮った。

「亡霊などと名付けるものはこの人生にはありません！  
断じて断じてありません！  
それは単なる神経です！  
マドリッド市民の神経です！」

新聞記者は赤面してそのまま後へ引退がった。

「おお妖怪花！ 妖怪花！ 人間を喰った妖怪花！ その妖怪花はどうしたろう？ 妖怪花はどうもしない。そのまま其処で枯れたのである。その後誰もがその花のために餌食になろうとする者がいないので自然に花は枯れたのである。」



# 青空文庫情報

底本：「国枝史郎探偵小説全集 全一卷」作品社

2005（平成17）年9月15日第1刷発行

底本の親本：「現代」

1923（大正12）年11月

初出：「現代」

1923（大正12）年11月

入力：門田裕志

校正：湖山ルル

2014年3月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 物凄き人喰い花の怪

国枝史郎

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>